

交響詩『フィンランディア』

Consultant 会誌編集専門委員会

1——元気の出る音楽

交響詩『フィンランディア』。曲名だけでその旋律が浮かぶ人もいだろう。さらに1990年の映画『ダイハード2』で効果的に使われていた勇ましい曲と言えば、多くの人に分かってもらえるのではないだろうか。

この曲は日本でも有名なフィンランドの作曲家、ジャン・シベリウスが33歳の1899年、ヘルシンキに在住していた時の作品である。新聞社が主催した愛国的な歴史劇のために作曲されたものの一歩である。

フィンランドは約600年余りスウェーデンに支配され、1809年からはロシアに併合されていた。当初、ロシアからは大幅な自治権を与えられていたが、ニコライ2世による圧政が1899年から始まり、次第に独立の気運が高まっていった。そのような時期に『フィンランディア』は作曲された。



■写真1—日本楽譜出版社版の「フィンランディア」の楽譜

2——アナリーゼ

『フィンランディア』は、ロシアによる圧政への怒りや、祖国を称え独立に向かう人々の心情が巧みに表現されている曲である。演奏時間が8分ほどと短いこの曲は、圧政の苦悩を表現した重々しい「苦難のモチーフ」で始まる。その後、独立に向かっの「闘争の呼びかけのモチーフ」、そして「勝利に向かうモチーフ」へと進む。ここまで聴くと気持ちが高揚して元気が出て来る。この後、心が癒されるような美しい旋律が奏でられる。これは後に、フィンランドの文学者ヴェイッコ・コスケンニエの『雪の轍』(1904年)の中の詩を付け、「フィンランディア賛歌」として歌われるようになり、フィンランド第2の国歌とまで言われ親しまれている。歌詞は「朝の光が夜の闇の力に打ち勝ち お前の朝が来たのだ 祖国よ」と言うような内容である。そして曲は大団円を迎える。

実は『フィンランディア』は当初「スオミ」と言う曲名であった。スオミとは、フィンランド人が自分たちの国を呼ぶ時の言い方で「沼と湖の国」という意味である。この曲は愛国的作品で、自由への欲求、権力への怒り、独立への闘争が表されて、国を統一に導く力を持っていた。そのため、ロシアは国内での『スオミ』の演奏を禁止した。フィンランドがロシアの一部として参加した1900年のパリ万国博覧会では、『祖国』という曲名に変えて演奏された。その後、独立運動の象徴となっていたこの曲は、「祖国の名」そのもので呼ぶ『フィンランディア』と命名された。

そしてフィンランドは、1917年のロシア革命の際に念願の独立を果たした。



■写真2—沼と湖の国、フィンランド



■写真3—シベリウス・アカデミー。旧へ ■写真4—1917年のフィンランド独立までは「聖ニコラウス教会」と呼ばれていたヘルシンキ大聖堂(ヘルシンキ市内) ■写真5—1910～1914年に建設されたヘルシンキ中央駅(ヘルシンキ市内)

3——舞台はフィンランドとシベリウス自身

1865年12月8日、ヘルシンキの北にあるハーメンリンナで生まれたシベリウスは、森と湖の大自然に囲まれた環境で過ごし、幼い頃からバイオリンを演奏し音楽に親しんでいた。20歳になってヘルシンキ大学に通う傍ら、ヘルシンキ音楽院のバイオリン科のみを受講していた。バイオリンのソリストを目指すものの「あがり症」のため舞台では失敗する。しかし音楽が好きで作曲家になる。

1892年、シベリウスはアイノ・ヤルネフェルトと結婚する。フィンランド文化の熱心な支持者一家のアイノの兄は、高名な作曲家・指揮者であった。ヤルネフェルト一家と接したことで、シベリウスはフィンランド文学からさらに深く影響を受けるようになる。フィンランド文学で最も重要なものの一つに、フィンランドの民族叙事詩である『カレワラ』がある。カレワラとは「フィンランドを作った神カレワの国」と言う意味で、ロシアからの独立を導くのに多大な影響を与えたとされている。この中の登場人物に、妻の名前の由来と思われる悲劇の乙女「アイノ」が出てくる。

1904年9月24日、シベリウス一家は、ヘルシンキの北約30kmのヤルヴェンパーに家を建てて引っ越す。森と田園、近くに湖もある豊かな自然に囲まれた場所である。斜面にある家は妻アイノにちなんで「アイノラ荘(アイノの里)」と名付けた。この田舎暮らしは作曲に影響を与えたとされている。以後、1957年9月20日に死を迎えるまで過ごす。しかし残念ながら、自己批判的な面もあってか、晩年はほとんど作曲ができなかった。シベリウス夫妻は、希望通りにアイノラ荘の南側に埋葬され、今もこの地の豊かな自然を見守り続けている。

祖国フィンランドへの強い愛を創作の糧としたシベリウス。国を独立に導いた英雄として、フィンランドの人々の尊敬を集めた。そして現在も深く敬愛されている。

もし精神的な困難にぶつかった時には、『フィンランディア』を聴いてみると、独立を果たしたフィンランドの人々から勇気を分けてもらえるかもしれない。

(文章 塚本敏行)

<参考資料>

- 1) 『フィンランディア Op.26』日本楽譜出版社
- 2) 『シベリウス アイノラ荘の音楽大使』ひのまどか著 1994年 リブリオ出版
- 3) 『名曲探偵アマデウス 事件ファイル#8 ～美酒は謎の味わい～』NHK放送番組
- 4) 『クラシック・イン34 グリーグ/シベリウス』2006年 小学館
- 5) 『この1冊で読んで聴いて10倍楽しめる! クラシックBOOK』飯尾洋一著 三笠書房

<写真提供>

- 写真1 塚本敏行、写真2 ツルネン マルティ、写真3、5 松田明浩、写真4、8 初芝成應、
写真6 遠藤徹也、写真7 藤井千晶



■写真6—ヤルヴェンパーの豊かな自然に囲まれたアイノラ荘



■写真7—ヤルヴェンパーの地を見守り続けるシベリウス夫妻



■写真8—1967年に女性彫刻家エイラ・ヒルトゥネンにより作られたシベリウスの顔の彫像(ヘルシンキ市内のシベリウス公園)